

## グルントヴィの教育理念の今日的意義

児玉 珠美

### Contemporary Significance of the Educational Philosophy of Grundtvig

Tamami KODAMA

#### はじめに

N.F.S.グルントヴィ (Nikolaj Frederik Grundtvig) は1783年、デンマークのシェラン島南部、ウズビュ村の教会牧師館に生まれた。後にコペンハーゲンで詩人、牧師として著作活動や言論活動を行った。晩年には政治家として活動し、1872年に亡くなる。「デンマークにとって、グルントヴィほど重要な意味を持つ人物はいない<sup>1)</sup>」と言われるように、デンマーク社会に多大な影響を残し、現在でもデンマークの「国父」と言われる思想家である。聖職者であるにも関わらず国家教会の批判し、近代デンマークの思想家として多くの著作を残したグルントヴィであるが、後世への最も大きな貢献は彼の教育論であったとされる<sup>2)</sup>。デンマーク教育省ウェブサイトには次のように記載されている。

デンマークの私立学校の伝統や考えは、聖職者、詩人、政治家であるグルントヴィ、教師であったクリステン・コルの功績に由来している。彼らの考えに基づいて「生活の言葉に基づいた生活学校」として、1844年に国民高等学校が設立され、1852年に子どものための学校が設立された。それらは、特に農村の人々のためのものだった<sup>3)</sup>。

グルントヴィの教育理念がデンマークの教育に大きな影響を与えたことが、この叙述からもわかる。上記内容に記載されている「生活の言葉に基づいた生活学校」とは、グルントヴィの教育理念の基に設立されたフォルケホイスコーレ (Folkehøjskole) のことである。現在もデンマーク国内をはじめ、北欧諸国を中心に運営されている。そして、「生活の言葉に基づいた生活学校」において最も重視されたのが「生きた言葉と相互作用による対話<sup>4)</sup>」であった。

現在もなおデンマークで影響力があると言われるグルントヴィの教育理念を支えていた「生きた言葉と相互作用による対話<sup>5)</sup>」とは、いかなる内実のものであったのか<sup>6)</sup>。グルントヴィの「生きた言葉と相互作用による対話」を論じていくことにより、グルントヴィの教育理念を明らかにし、さらに現代においていかなる意味を有するのかを検証していく。

本論文の目的は、グルントヴィの教育理念を具体的に論じていくことにより、デンマークの教育におけるグルントヴィ教育理念の今日的意義を見出していくことである。

## 1. グルトヴィの「生きた言葉 (det levende ord)」

### (1) 歴史的な「生きた言葉」

「生きた言葉」とは、個々の生の具体的な面を記述するための新しい言葉を各個人が見出すことであるとグルトヴィは述べている<sup>7)</sup>。「個人が結びつけられている現在の生との連続性からの歴史の非分離性に基づいて<sup>8)</sup>」生きることができないならば、歴史は死んだものと同じだと主張している。つまり、グルトヴィは歴史が人類史であると同時に自己の人生史でもあるという考えに目覚め、歴史を創造していく源は個々の内なる想像であり、言葉として表現されるものだと考えたのである。

このようなグルトヴィの言語観には、ドイツの哲学者であるヘルダーの影響があったと考えられる。当時、学术界では言語の起源を人間ではなく、神から与えられたものとする言語神授説<sup>9)</sup>が反響を呼んでいた。この説に対して、ヘルダーは1772年に『言語起源論』を出版し、「言語なしでは、人間は理性を持たないし、理性なしでは人間は言語を持たない。言語と理性なしでは人間は神の教えを受けることはできない<sup>10)</sup>。」と述べ、神による言語創造を否定したのである。言語神授説の立場の研究者たちからの激しい非難があったが、ヘルダーの言語観が後の近代言語学に多大な影響を与えたことは言うまでもない。

また、ヘルダーは人間の精神的発展においては、個人と国民との繋がりが重要であると考えた。国民は独自の国民性を有するがそれは遺伝的なものではなく、学ぶことによってのみ得られるとした。さらに人間の精神的発展の成果として言語を捉えたヘルダーは、子どもの成長を周囲の刺激に鼓舞されて内在的潜在能力が顕れた結果であるとし、潜在能力を顕在化する学習過程において重要なものが言語と歴史であるとしたのである。グルトヴィもまた、ヘルダーの言語観を継承し、言語を国民の文化を創造していく不可欠な要素として捉えていた。さらにグルトヴィは活字としての言葉ではなく、生活の中の「生きた言葉 (det levende ord)」にこそ、その力があると考えたのである。

### (2) 「詩的」である生きた言葉

歴史のすべての時代を通じて、人間の存在の本質を示すと同時に本質を構成してきたのは人間が実際に話す言葉であり、この話される言葉こそがインスピレーションとも言うべき生きる意味を見出す自己覚醒を可能にしていくとグルトヴィは考えた。そして、自己覚醒は「詩人たちの手<sup>11)</sup>」による生ける口承伝達によってこそ、積極的に推進することができると述べている。

グルトヴィがここで言う詩人とは、未来に向けて人びとに過去の物語詩を口承伝達していく存在としての詩人である。活字として詩作をするのではなく、あくまで口承で詩を伝えていくことに詩人としての意味があるとした<sup>12)</sup>。そして「詩」「詩情 (poesi)」とは、人々の脳裏に、あるいは人々の間に存在するシンボリックな感情であるとしている。つまり、詩が語られるときに生じる詩情とは、創造という精神的な関係、真理との関係で語られ、その精神を吹き込まれた詩人の発話として表出されることで、人々の感情に刻み込まれていくものであると説明している。そして、それらの詩は活字表記される狭義の詩ではなく、人々の想像力を生活の中で語られる生きた言葉によるものでなければならないとした。メルロ・ポンティが情報伝達のための言葉とは異なる「生きて語ることば<sup>13)</sup>」として表現した「詩的なことば」と重なる。

この「詩的なことば」は、言葉を発する人間の感情と想像力が込められているものであり、

個別的、個性的な言葉であると説明できる。もちろん意味的な理解の共有はあるわけだが、音声としての声に込められているものが重要だということなのである。

さらにグルントヴィは、生きた詩的な言葉は国民すべてが理解できるということが前提であるべきとした。語られるべき言葉は国民共有の母語でなくてはならず、言葉による階級選別意識を徹底的に批判した。「精神にとっての恐怖であり、すべての言語にとって疫病であるラテン語<sup>14)</sup>」とあるように、ラテン語に対するグルントヴィの批判は激しいものであった。この背景には当時のデンマーク語の置かれていた状況があったと考えられる。

### (3) 生活語としての「生きた言葉」

当時のヨーロッパにおいては、教会や学問的な領域で使用が認められていた言語は、ラテン語であった。ルネサンス以降、英語、フランス語、ドイツ語が学術用語としての権利を獲得していく中、デンマーク語は国内においてでさえ野蛮で無知な言葉とされ、教会や学問的な場ではラテン語、上流階級の公的な場においてはフランス語、ドイツ語が使用されていた。デンマーク語が無知な農民の言葉であり、有力者はラテン語学校へ行き、やがてデンマークの高官となり権力を持つ。当時、国民の8割を占めていた農民が、国民としての権利を持ってないという矛盾した状況に対する憤りを抱いていたグルントヴィは、ラテン語重視の学問に対し、「民衆・民衆から引き離され」「死の状態であり」「人間の生に対して敵対的である。」と主張した<sup>15)</sup>。

グルントヴィはアカデミックな人工的な言葉ではなく、自分たちの実存を相互に確認していくことが可能な日常語を擁護した。そして、デンマーク語によって国民自らを覚醒していくことこそが「啓蒙」であり、母語で語られる物語や神話の中にこそ、人々が国民になっていく覚醒のインスピレーションを生んでいく力があると考えたのである。物語や神話に代表されるファンタジーについてのグルントヴィの叙述には、次のような指摘がある。

ファンタジーの感情は依然として人間の精神的諸能力のなかで最強の能力であり、知性の錯誤に対してバランスを取り戻させる自然の重しである。ファンタジーや感情は我々の社会的諸関係を創造したのであり、それゆえに、我々の社会的諸関係を生んだ武器であり、沈黙することのできない社会的諸関係の内面の語り部である<sup>16)</sup>。

このファンタジーが最も豊かに表現され、デンマークの歴史を物語として学んでいくことが可能な素材として、グルントヴィは神話やデンマーク民話を子どもたちに語ることの重要性を主張した。グルントヴィは北欧学問こそが啓蒙にとって必要であり、北欧的な眼によって精神世界を考察するとき、芸術と哲学の普遍史的發展の概念を獲得するとした。「ギリシア的・北欧的・あるいはデンマーク的な生の発展と精神の形式が、その萌芽を潜伏させていた北欧の神々を与える当該の実態であり、それらの神話の普遍的な重要性を与えるもの、とくに我々『北欧の住人』にとって計り知れない価値を与えるものである<sup>17)</sup>」と考えたのである。

グルントヴィが民族的な神話を次世代に語り継ぐ重要性を説いた背景には、彼の民主主義観が窺えるとグルントヴィ研究の第一人者であるオヴェ・コースゴーは解説している。

グルントヴィは国家の基盤は国民ひとりひとりの自由と自発性であると考えていた。社会は一人一人の自由意思を有するものたちが共同体の発展に責任を担うことの上に築かれるべきとし、あらゆる強制は国民意思の神経を破壊するものと主張した。—中略—グルン

トヴィは国家と市場に比べて国民共同体にはるかに高い優先権を与えた。道徳的義務は国家にも市場にも置くことはできず、最終的には経済とは無関係の信頼関係及び連帯の絆の上に築かれるものとしたのである<sup>18)</sup>。

グルントヴィが民族的神話や共通の詩歌の必要性を説いた理由がここにあるといえよう。グルントヴィは「個人主義と協同主義を結び付けようとした<sup>19)</sup>」のであり、「他者との非競争的な連合と協力に、自己認識過程の理想<sup>20)</sup>」があるとした。そして、個人と共同体の間の絆の構築に必要な不可欠なものが、相互作用としての対話であると考えたのである。

## 2. 相互作用 (vekselvirkning) としての対話

### (1) グルントヴィの相互作用における対話の本質

グルントヴィは、庶民の啓蒙のためには母語であるデンマーク語による相互作用が社会のあらゆる場で必要であると考えた。しかしながら、グルントヴィが求めたのは創造主との対話ではなく、人間との対話であった。国民の生の過程で共に呼吸するようになる言葉の意義の「生きている」ことの力強さを強調した。グルントヴィは、相互作用は異なった状態がそのまま存在し、異なっていることで互いを豊かにするように働く二つのものの中に存在するバランスを保持していくものと考えたのである。

デンマークの生涯教育研究者であるスティーブン・ポリッシュは、グルントヴィの相互作用について次のように述べている。

グルントヴィは社会内部の人々にせよ、様々な社会制度にせよ、互いに自分のほうが優勢になって他を支配しようとする傾向があることを痛切に感じていた。国家と軍隊、教会と国家、国家と学校、いずれも相手を自分に取り込み、力が一方的に流れる状況を作り出そうと常に努力している。同じことは教室でも見られ、教師は生徒達に自分の知識や見方を注ぎ込もうとするため、生徒たちより優位な立場に立とうとする。自由を獲得するために権力構造の解体をしても、優位性に依存している限りは、それはまた別の権力でしかない。すべての人が存在する権利を持つということを相互に認識に、それに基づいて社会のなかのすべての要素が平和的に変化することを求めたのである<sup>21)</sup>。

個人と個人が相互に対話し尊重していく中で学びあっていける相互認識があり、その相互作用は、社会のあらゆる組織、場面において展開されていく。このような対話が社会を創造していくという相互作用の考え方は、単に個人と個人が向かい合って話しをするという次元から、対話の質的变化を牽引する。まさにブーバーの対話論にあるように「相互に向かい合う態度・向かい合う心<sup>22)</sup>」こそが対話を成立させるものだという考えである。単に言葉を語りかけるだけでは、「対話の現象はあっても、対話の本質は存在しない<sup>23)</sup>」ということであり、そこに「人格的存在の間の対話<sup>24)</sup>」がなければ対話とはいえないということである。

「真の共同体はすべて人々が生きた中心にたいし、生き生きとした相互関係をもつこと、さらに人々の間で相互に生きた関係をもつことである<sup>25)</sup>」としたブーバーと同様に、共同体の基盤が真の対話であることをグルントヴィは理解していたといえる。グルントヴィは多数の人々

へ語りかけることも含めて、生きた言葉で語りかけ、相手を承認し、相手からの語りかけを待つことを対話としたのである。ここにグルントヴィの対話の本質があると考えられる。特に若い世代の人たちと、彼らが生活の中で実感できる生きた言葉で語りかけ、彼らを一人の人間として同等に承認し対話していくことで、真の相互関係が構築されていくとしたのである。

## (2) 啓蒙教育としての対話

グルントヴィは生きた言葉による対話を通じ、人々は啓蒙を体験して行くことができるとした。対話には自国の歴史が語られていくことが必要であり、その経験こそが最良の肥沃な土壌を醸成するであろうと考えていた。個人の犠牲や強要からではなく、社会の相互作用の中で公共精神が生み出されていくのであるとした。そして、生きた言葉による対話を通じて啓蒙活動をしていく場として誕生したのが、農民の青年を対象とした「生のための学校」ホルケホイスコーレ (Folkehøjskole) であった。

前述したように、グルントヴィは学校においては、教師と生徒の相互作用が最も重要であるとしていた。教師から教えられる学科についても「それが言語であれ、数学であれ、歴史であれ、もしくは個々の教師が彼自身の楽しみのため、そのために時間をみつけ楽しもうと、主要なことは相互的であり、生きていて一般的な関心であることでなければならない<sup>26)</sup>」と主張している。「何よりもまず庶民が学校に尊敬と愛着をもち、よい観念を得ることが、彼ら自身が学校に固有な仕方であることがらを学ぶよりも、私の眼からすると重要<sup>27)</sup>」とし、「教師は若者のうちに実在している生を単に目覚まし、養い、啓蒙するのみである。講義から会話へ転換することによって、はじめて達成させる<sup>28)</sup>」ことができると考えていたのである。

教えるという講義形式の「優位に立つ<sup>29)</sup>」傾向からは人間の生の自覚は生まれないとし、対話討議の重要性を説いた。教師と学生との相互作用の基本となるものは、自由な対等な対話と討議形式であることを強調している。したがって学校においては、筆記試験というものの価値を認めなかった。グルントヴィによれば、試験とは「年長者が、若者の経験の範囲では答えられず、ただ他人の言葉を繰り返すことで答とするにすぎないような質問で、若者を苦しめるもの<sup>30)</sup>」である。この考え方が現在もおデンマークの教育に影響している。

## 3. グルントヴィの教育理念の今日的意義

グルントヴィが主張した「生きた言葉」による対話とは、単に口頭で伝えるという次元のものではなかったということは、すでに明らかにしたとおりである。それでは果たしてグルントヴィの教育理念は、デンマークという地域性、19世紀という時代性の枠組みの中での限定的意味を持つだけのものなのであろうか。「生きた言葉」とは現代的な文脈においては、いかなる意味を有するのであろうか。

その問いのひとつの答えとして、「一次的な声の文化<sup>31)</sup>」を提唱したウォルター・J・オングの考えを述べていく。オングによれば、「一次的な声の文化」とは文字文化以前の書くことを知らない人々の文化のことである。まさしく、書き言葉の習得以前の子どもたちの文化である。しかしながらこの一次的な声の文化は二次的な文字の文化に完全に転換していくわけではなく、文字の文化の底流には常に「声の文化、オラリティー」が存在すると述べている。オングは「言語は基本的にはどのような場合でも話し聞く言語であり、音の世界に属している<sup>32)</sup>」

としている。

人間の日常生活は「話す・聞く」という声の文化から逃れられないということである。対話における言葉は声という音声を通じて存在し、すべての音は音を出すものの内部構造を通過して表出され、中でも人間の声は人間の身体の内部から出ているがゆえに、人間の身体は声の共鳴体をなしているとする。したがって音声は身体の力を使用しなければ音として響くことができず、「すべての音声、とりわけ口頭での発話は、生体の内部から発するのであるから、力動的dynamicなのであり、聴覚として捉えられるオーラルな言葉は、視覚的に捉えた言葉には存在しないエネルギーが内包されている」とオングは述べている。視覚的に捉えられる活字としての言葉についても、オングは次のように述べている。

活字に深く毒されている人びとは、ことばは、まず第一に声であり、できごとであり、それゆえに必然的に力によって生み出さされるものだと、ということをおぼれている。ことばは平面上に「なげだされた」ものではない。そうしたモノは、根本的な意味では、死んでいる<sup>33)</sup>。

この記述は、グルントヴィの口頭教育を重視した内容と一致する。さらにオングは、声の文化特有の記憶形成があると述べている。口頭で語られた内容は、声として取り入れられた言葉を逐語的に記憶するのではなく、物語の再構成という形で記憶していくという。物語の再構成という作業は、個々の人間の想像力を機能させる記憶作業となる。つまり、声の文化の記憶形成が文字の文化の記憶形成と決定的に異なるのは、身体的な動作を伴っている点だということである。話される言葉は「全体的な『人間の』生存状態なる様相<sup>34)</sup>」であり、それゆえ常に身体を巻き込んでいく。声の文化においては身体的な要素が常に伴い、それゆえに想像力を刺激していく。そして物語の再構成という方法での記憶は、個々の人間の中に物語を創造していくことに繋がっていくのである。

グルントヴィもまた、人間を有機的な統合物として捉えており、言葉も単に音声単語として発せられるのではなく、人間のあらゆる機能と統合してせられるものとしていたと考えられる。口頭という行為には、言語を表出する側、譲受する側の身体的要素が存在している。言葉を発するときに伴う身体としての様々な要素— 視線、表情、身振り、声質、声の抑揚等、これらすべてが対話の雰囲気構築する要素となり、声の文化を創り上げていくのである。今日では社会学や様々な研究領域においても身体と言語との関連性などが論じられ、一般的知識として認知されるようになってきたが、グルントヴィの時代、科学的な論証段階までには至ってはいなかった。しかしながら、グルントヴィは身体的要素が不可欠な「対話」こそが個々の人間のインスピレーション、詩情を刺激していくための言葉を生み出すことができるのであるということに察知していたのである。

そしてグルントヴィの理念を継承し、言葉をテキストとしてだけではなく、人間の感情や様々な要素が内包されるものとして捉えていくこと、意味だけでなく情動的なものも含めた声としての側面が教育現場においていかに重要であるかを、教育者であるクリステン・コルが導き出したといえる。

グルントヴィの教育理念を具現化した教育者であるクリステン・コルは、眼前の子どもたちにどう語りかけていくことが彼らの覚醒を導くことになるのかを追求した結果、言葉の持つ身体的要素の重要性を見出したといえよう。音声としての言葉を発するときの躍動感こそが、子

どもたちの想像力を掻き立てる大きな要素であるとした。コルは、知識的、体系的学問の基礎となるべき人間教育がまずは初等教育期間に必要であり、その根本は「想像力」にあるとしている。「初等教育が、もっぱら理性に向かって語りかけて、感情にはただ部分的にしか語りかけず、その一方でファンタジー、想像力をほとんど無視してきたのは犯罪的な過ちである<sup>35)</sup>」として、コルは当時の初等教育における教理問答式の宗教教育を批判した。体系的な教理問答式の詰め込み教育はデンマーク人には合っておらず、数学や幾何学、算数の授業であるならば教理問答式は成立するかもしれないが、人間としての成長を促す初等教育においては物語が最も必要であるとした。物語や歴史の重要性について下記のような言葉をコルは残している。

デンマークの古い民話、物語、伝統、歴史の話、それらが、デンマーク民族の一部を成し、何千年も通じてわれわれの民族の生に深く貫いてきた詩的な素質が再び目覚めるべきである。物質主義と感覚主義に押し流されてしまわないように<sup>36)</sup>。

グルントヴィの教育理念はコルの教育実践の中で、話すこと、対話することが教育にとっていかに重要であるかを検証していったといえる。そしてこれらの教育理念は、デンマークの教育カリキュラムや評価方法等の基本的な方針に多大な影響を与えてきた。例えば、初等教育機関においては基本的には点数評価をする筆記試験は実施しないことになっている。また、前期中等教育終了時点におけるナショナルテストや高校及び大学における試験においても、口頭試験実施が義務付けられており、グルントヴィの評価に対する理念が生き続けているといえるであろう。

「他者との非競争的な連合と協力に、自己認識過程の理想<sup>37)</sup>」があるとし、個人と共同体の間の絆の構築に必要なものが、相互作用としての対話であるとしたグルントヴィの言葉は、デンマーク教育の今日的状況にも深い示唆を与えるものではないだろうか。

グルントヴィの「生きた言葉」による「対話」は、人間が向かい合って対話することの根源的な意味を語っているといえよう。リテラシーとしての書く言葉ではなく、声としての言葉による相互作用を通してこそ、人間の感情や共感が生み出され、人と人が繋がっていくことが可能になるということを示している。さらにグルントヴィの対話理念をコルが教育実践として具現化したことにより、教育における声の文化の意義と重要性が明らかになったといえよう。そしてグルントヴィの時代から200年経た現在、デンマークの社会において、様々な領域での対話による相互作用が実現しているという事実がある。デンマークでは同じ高さの目線での対話の実践が、教育現場でも、企業内でも、ごく自然に行われている。なぜそのような対話が可能なのかを聞くと「デンマークではそれが当たり前だから。」という答えがいつも返ってくる。デンマークにはグルントヴィの魂が生きていると言われる所以でもある。

グルントヴィは自分の死後、デンマークが理想的な国家に向けて持続していくことを願っていた。そのために様々な形で自分の理念を遺産として遺している。多くの詩や歌が現在もお、歌集として公私立の学校の朝の会で歌われていることもそのひとつである。国民が唱和する歌があるということが、共同体意識構築の大きな役割を担っていることを今も伝え続けている。共同体としてのデンマーク国家存続を主張してきたがゆえに、歴史的にはナショナリストと呼ばれた時期もあるが、幸福度や人への信頼感が常に高いデンマーク社会の基盤を支えてきたもののひとつがグルントヴィの理念といっても過言ではないであろう。グルントヴィの「生きた言葉と相互作用としての対話」という教育理念は、社会を持続可能にしていくために教育が何

をなすべきなのかという今日的課題を、現在のデンマーク社会を通して私たちに提示しているといえるのではないだろうか。

グルントヴィは「詩人たちの手<sup>38)</sup>」にとってのみ、精神の心のために語ることができると考えた。そして、詩人とは未来に向けて人びとに過去の物語詩を口承伝達していく存在であるとしていた。現在における「詩人」とは、祖父母であり、親であり、そして誰よりも教員であらねばならないということを、200年と時を経てグルントヴィは語りかけているのではないだろうか。

## おわりに

本論においては、グルントヴィの教育理念である「生きた言葉と相互作用」について具体的に論じ、その内実を明らかにした。さらに、それらの概念が現代の文脈の中では、いかに捉えられるべきかを論じた。「声の文化 (オラリティー)」という新しい視点から照射することにより、声としての「生きた言葉」が教育の場において普遍的な意味を持つ可能性について言及した。

2009年以降、デンマークでは様々な教育改革がなされてきたが、現在、デンマーク政府は2020年に向けてPISAの数値目標を掲げる等、さらに新しい改革を推進している<sup>39)</sup>。口頭による対話能力や、想像力を評価することを重視してきたデンマークの教育が変容していくことに對し、国内外からも危惧の声が上がっている。2014年3月に実施した公立学校教員のインタビューにおいて、50代の教員に「グルントヴィとコルについて若い世代の教員は学んでいますか。」という問いかけをした。「グルントヴィやクリステン・コルの教育理念は子どもたちを收容していく上で大変重要な内容です。若い教員も学んでいると思うのですが、いいえ、必ずそうあってほしいと願っています<sup>40)</sup>。」とベテランの教員は答えた。

グルントヴィやクリステン・コルの教育理念が基盤となる「デンマークらしさ」が教育においても重視されてきたデンマークにおいて、教育省の指導の下、教育改革が実施されていく中、グローバル化とデンマーク教育の特色とのバランスをどうとっていくのか。教育現場の教員や保護者たちがどう対応していくのかを今後も注視していきたい。

## 注

- 1) カイ・タニング(1897)『北方の思想家グルントヴィ』渡辺光男訳、杉山書店、p101。Kai Thaning N.F.S(1972) *GRUNDTVIG The Danish Cultural Institute*, Copenhagen.
- 2) オヴェ・コースゴー (2012)「グルントヴィの教育思想」 日本グルントヴィ教会会報、No24 2012.12。Ove Korsgaard (2002) "Grundtvig's Educational Ideas" Heimdal.No24.
- 3) デンマーク教育省「私立学校について」 [http://eng.uvm.dk/Private School in Denmark](http://eng.uvm.dk/Private%20School%20in%20Denmark)  
<http://eng.uvm.dk/Education/Primary-and-Lower-Secondary-Education/Private-Schools-in-Denmark> 2012年7月30日最終閲覧。
- 4) N.F.S.グルントヴィ (2010)『世界における人間』小池直人訳、風媒社、p72。Nikolay Frederik Severin Grundtvig (1817) *Mennesket i Verden*, Danne-Virke.
- 5) 同上。
- 6) グルントヴィの影響が現在のデンマーク教育に影響を与えているという事実については数値的なデータによる実証について筆者は未調査ではあるが、視察インタビューした公立学校2校の教員6名が、グルントヴィとクリステン・コルの教育理念がデンマークの基盤となっていると答えている。理念の具体的内容については、「対話と相互作用」ではなく、多くは「対話と民主主義」という表現がなされていた。(2013年8月27日 Utterslev Skole、2014年3月12日 Vallensbæk Skole)



- 7) N.F.S.グルントヴィ (2011) 『生の啓蒙』 小池直人訳 風媒社、p79。Grundtvig ,N.F.S. (1832) *Universal-Historisk, Vidskab,i*.
- 8) カイ・タニング『北方の思想家グルントヴィ』 p101。
- 9) ヨハン・ペーター・ジュスマルヒ (Johann Peter Süßmilch) による言語神授説。糟谷 啓介 (1998) 「文法と神：一般文法と言語神授説」一橋論叢 120 (2)、一橋大学、pp137-153。
- 10) ヘルダー (1972) 『言語起源論』 木村直司訳、大修館書店。
- 11) N.F.S.グルントヴィ 『生の啓蒙』、p159。  
グルントヴィは『生の啓蒙』の中で、詩人の役割について述べている。生における詩人や預言者の言葉は、人々に未来を学び考えることを可能にさせる存在としている。
- 12) 「口承としての言葉」と言う場合、聴覚障がいの方々への配慮を考慮すべきである。身体的に向き合う言葉という広義の意味で口承としての言葉を捉えるならば、手話やボディランゲージも口承としての言葉として捉えることが可能であると筆者は考える。
- 13) 和田町子 (2007) 「<語る言葉>について、その一—メルロ＝ポンティの言語哲学に関する一考察」聖心女子 大学論44集、pp98-99。
- 14) N.F.S.グルントヴィ 『生の啓蒙』 p33。
- 15) N.F.S.グルントヴィ 『世界における人間』 pp14-15。
- 16) 同上、pp81-82。
- 17) N.F.S.グルントヴィ 『生の啓蒙』 pp18-19。
- 18) オヴェ・コースゴー (1999) 『光を求めて—デンマークの成人教育500年の歴史—』 高倉尚子訳、東海大学出版、p147。Ove Korsgaard (1997) *Kampen Om Lyset-Dansk Voksenoplysning Gennem 500 ar*, Gyldendalske Boghandel ,Nordisk.forlagA/S.
- 19) オヴェ・コースゴー 「グルントヴィの教育思想」。
- 20) 同上。
- 21) スティーブン・ボリッシュ (2011) 『生者の国—デンマークの学ぶ全員参加の社会』 新評論、p192。  
Steven M.Borisoy (1991) *The Land of the Living*, Blue Dolpin Publishing,Inc.
- 22) マルティン・ブーバー (1979) 『我と汝・対話』 植田重雄訳、岩波新書、p184。
- 23) N.F.S.グルントヴィ 『世界における人間』 p204。
- 24) N.F.S.グルントヴィ 『生の啓蒙』 p208。
- 25) 同上、p58。
- 26) 同上、p150。
- 27) N.F.S.グルントヴィ 『生の啓蒙』 p95。
- 28) 同上、pp100-102。
- 29) N.F.S.グルントヴィ 『世界における人間』 pp14-15。
- 30) 同上。
- 31) ウォルター・J・オング (1991) 『声の文化と文字の文化』 藤原書店、p32。Walter.J.Ong (1982) *Orality and Literacy*, Methuen&Co.Ltd.
- 32) 同上、p74。
- 33) 同上、p75。
- 34) 同上、p144。
- 35) クリステン・コル (2007) 『子どもの学校論』 清水満訳、新評論、p95。  
Cristjan R&Stenbk (1893) *Bidrag til Kristen Mikkelsen Kolds, levnedstegning*.
- 36) マルティン・ブーバー (1979) 『我と汝・対話』 植田重雄訳、岩波新書、p99。
- 37) 同上。
- 38) N.F.S.グルントヴィ 『生の啓蒙』 p159。  
グルントヴィは『生の啓蒙』の中で、詩人の役割について述べている。生における詩人や預言者の言葉は、人々に未来を学び考えることを可能にさせる存在としている。
- 39) デンマーク政府 「公立学校改革に関する政党の合意書」  
[http://eng.uvm.dk/~media/UVM/Filer/English/PDF/131007%20folkeskolereformaftale\\_ENG\\_RED.ashx](http://eng.uvm.dk/~media/UVM/Filer/English/PDF/131007%20folkeskolereformaftale_ENG_RED.ashx)  
2014年3月31日最終閲覧。
- 40) 2014年3月12日、Vallensbæk Skoleにおけるインタビュー内容より。

